第五節　昭和二十五年

①　学事抜粋

昭和二十五年

四月　　卒業制作展開催

五月二十日　医務室開所式挙行

十月十一日　平櫛田中寄贈作品受領式挙行

②　職員その他（主に「辞令簿」による。）

昭和二十五年

二月二十八日　西本順は本校教授兼東京芸術大学助教授より東京芸術大学助教授兼本校教授に配置換えとなる。

三月三十一日　本校講師兼東京芸術大学講師谷信一は東京芸術大学講師兼本校講師に配置換えとなる。

同　　日　脇本楽之軒は文部教官に任命され、東京芸術大学教授兼本校教授に補せられる。

同　　日　講師寺内万治郎は辞職する。

五月三十一日　本校教授兼東京芸術大学教授石田英一、小林古径、海野清、安田靫彦、小場恒吉、平櫛田中は東京芸術大学教授兼本校教授に配置換えされる。

同　　日　本校助教授兼東京芸術大学助教授山脇洋二、吉村順三、品田慎一は東京芸術大学助教授兼本校助教授に配置換えとなる。

同　　日　本校講師兼東京芸術大学講師奥村土牛、菊池一雄は東京芸術大学講師兼本校講師に配置換えとなる。

同　　日　本校助教授硲伊之助、山本丘人、入谷昇は東京芸術大学助教授に任命され、硲は本校教授兼任を、山本、入谷は本校兼勤を命ぜられる。

同　　日　文部事務官上原之節は文部教官に任命され、本校講師に補せられる。

同　　日　本校講師兼東京芸術大学講師山本豊市は東京芸術大学講師兼本校講師に配置換えとなる。

六月一日　桜林仁は東京芸術大学講師に任命される。

同　　日　山本豊市、菊池一雄、加藤顕清、中村伝治、清水正雄、村田徳松、蒔田宗次、吉野富雄、佐藤謙三、石川栄耀、山崎三郎、水谷武彦、関野克、石橋犀水、渡辺武夫、尾上柴舟、鈴木清は東京芸術大学美術学部講師に任命される。

同月三十日　講師中村伝治、依願解嘱。

八月十九日　吉川逸治は学術研究調査のため九ヵ月間フランスへ出張を命ぜられる。

十一月三日　教授小林古径は文化勲章を受章。

③　卒　業　式

昭和二十五年四月三日、第六十回卒業証書授与式が行われた。

式次第

一、着席　　二、校歌

三、学校長式辞　六、文部大臣祝辞
四、卒業証書授与　七、卒業生総代答辞
五、学長告辞　八、式終了

卒業者氏名

日本画科

市瀬幸助　西岡隆男　藤井恒男
小貫八郎　西嶋俊親　小林源次
川崎春彦　荻照正　阿部昭三
四田淳三　鹿目尚之　酒井陸治郎
松本清　加々見昭　皆吉志郎
松崎直樹　金子慶正　渋谷勝
福田達夫　余西喬　平賀重司郎
江尻十五郎　吉田宏　杉野仁彦
安宅慶四郎　高田保雄　横山一
宮本昭　高橋鎮明　小林炳
志賀博信　田中隆盛　須藤健一
横尾龍彦　鶴田昭男　宮村泰彦
小瀬正博　中谷真彦　渡部慧
北原正樹　中島靖侃　渡辺信子
油画科　中沢直三郎　内藤稚彦
飯野英　清水正策　加藤正
稲田俊志　山口寛　浮田克躬
橋本貫志　矢吹惣一　赤坂進
伴勝雄　丸山昭　彫刻科塑造部
船木日夫　小坂圭二

武井斌　中島広　星島光平
基俊太郎　後藤岱二郎　加藤央
碓田三平　工芸科鍛金部　窪田保彦
縄田正良　水口俊雄　崇島宰治
彫刻科木彫部　鎌田賢　山崎延繁
小鷹和美　寒川直　児島仁
小島晨男　工芸科鋳金部　新井英夫
邑田佐賀男　片岡陽一　秋野収
門脇大　高間隆二　袴田育造
川正大　青山洵　辻朔二郎
桜井克也　須賀正佐　松尾吉次
工芸科図案部　直野説守　栗山健三
牧野直之　市橋弥須夫　師範科
池田享　宮田宏平　井岡友諒
中西新太郎　工芸科漆工部　成木浩二
中尾喜保　今泉政司　岡崎資格
村越俊次　音丸馨　山口海一
柳沢淑郎　藪田実　立石清
森若正孝　川端義一　中村貞方
山崎昭二郎　山本春雄　永瀬丈夫
深川剛　子二山伯　内田佳男
田中勇　建築科　福島俊夫
西野寿美造　原田順　寺西愛
工芸科彫金部　鈴木正治　安斎徳衛

④ 級別各科人員表

昭和二十五年四月一日現在、（）は女子

各科別	二年	三年	四年	五年	六年	小計	計
日本画科		(5)一七	(5)一九	一		(10)三七	三七
油画科	四	(10)三八 特一	(12)二九 特一 選一			(22)七一 特二 選一	七四
彫刻科 石井教室		(2)一〇 特一	(2)五	一		(4)一六 特一	一七
彫刻科 平櫛塑造	一	六	(1)四	一		(1)一二	一二
彫刻科 平櫛木彫	二	五	五			一二	一二
工芸科 図案部		(2)二一	(1)一〇	六		(3)三七	三七
工芸科 彫金部	一	(1)七	(1)七	二		(2)一七	一七
工芸科 鍛金部		五		一		六	六
工芸科 鋳金部	一	四	四	二		一一	一一
工芸科 漆工部	五	八	(1)一五	一	二	(1)三一	三一
建築科		一二	一四	二		二八	二八
師範科		(5)一七	(2)五	三		(7)二五	二五
未復員						一四	一四
総計	一四	(25)一五二	(25)一一九	二〇	二	(50)三二一	三二一
特別学生		二	一			三	三
選科			一			一	一

⑤ 小場恒吉の日本芸術院恩賜賞受賞

昭和二十五年以降、日本芸術院恩賜賞賞金が授与されることとなり、その第一回受賞者に、長く本校に勤務した後ち東京芸術大学教授となった小場恒吉（本書第二巻556頁参照）が選ばれた。授賞の理由は『日本芸術院史』（昭和三十八年、日本芸術院事務局）に記されているが、その文のもとになった草稿は本校（藤田亮策原案）が作成したもので、さらに詳しく小場の業績が記されている。これも既に『小場恒吉先生遺作展』（昭和三十四年十月、秋田市美術館）に掲載されているが、ここに改めて原本を紹介しておく。

恩賜賞の受賞理由書

日本文様の研究　　小場恒吉

小場恒吉氏の研究は日本文様の時代的特徴と変遷を解明したもので、この道は学者と同時に技術家でなければ能く実体を把握し得ない分野の研究であります。

小場氏は明治三十四年頃より現在まで約五十年の長年月に亘り、世間的には目立たない極めて困難な仕事にもかかわらず、今猶七十有余才の老軀をささげ、寒暑をいとわず営々として所期の目的達成に努めておられます。

その研究範囲は、日本の他に中国及び朝鮮の古墳ないし古建築の装飾から、絵画彫刻の絵文様又は諸般の古美術工芸品に現われた形態、若くは文様などを対照（家カ）とするもので、総て調査は実測に基づく誠に尨（尾）大なものであります。